

Oliver Ludwig ● 著

月城慶一，ハーゲン愛美 ● 訳

## 実践にいかす歩行分析

明日から使える観察・計測のポイント

評者 山本澄子

国際医療福祉大学教授・福祉支援工学

現在、歩行分析に関連する多くの書籍のうち、国内で最も販売実績があるのは『観察による歩行分析』（医学書院、2005年）であろう。評者が行っている医療関係者を対象とした講習会では、参加者が講習会にこの本を持参されることが多い。評者はこの本の訳を担当した関係でサインを頼まれることがあるが、ほとんどの場合に持参された本が使い込まれていることに驚いている。『観察による歩行分析』は購入しただけでなく、実際に活用されている本なのだと実感する。

今回紹介する『実践にいかす歩行分析』は、『観察による歩行分析』の次のステップに読まれるべき書籍である。原著者はドイツ人の生物学博士であり、整形外科靴技術の臨床応用と技術開発に取り組んでこられた Oliver Ludwig 氏、訳者は『観察による歩行分析』の訳で中心的役割を果たされた月城慶一氏と、多くのドイツ語の専門資料翻訳の経験をお持ちのハーゲン愛美氏である。

本書の特徴は以下の2点である。1つはタイトルのとおり、非常に実践的であること、2つめは比較的簡便な計測器を使用した計測を対象としていることである。従来、計測器を使用した歩行計測は3次元モーションキャプチャと床反力計といった高価で大掛かりな装置を用いたものであり、結果は正確で情報量が多いが、実施できる施設が限られているため研究目的に使用される場合がほとんどであった。これに対して、臨床の現場ではまさに“観察による歩行分析”が行われている。目視による観察は重要であるが、正確性や情報量において不足している点は否めない。本書の原著者が提唱するのは、上記2つの歩行分析の中間に位置する比較的簡便な計測器を使用した歩行分析である。具体的にはペダバログラフイーと呼ばれる動作中の足底圧分布を測定する装置とビデオカメラを使用した2次元の分析につい

て、機器の原理から実際の使用方法、データの読み方までが詳しく紹介されている。いずれも原著者の豊富な臨床経験に基づいて、多くの症例データの提示とともにデータの読み方が紹介され、まさに実践的な内容といえよう。さらに、本書では歩行だけでなく走行の分析やランニングシューズの評価や足底板の最適化の手法についても述べられている。特に、目で見ただけではわからない動作中の足圧分布のデータを治療につなげる点は秀逸である。

このように本書は非常に多くの内容が盛り込まれ、200ページを超える書籍である。教科書のように初めから通して読むというよりも、臨床の場で疑問に思ったことを解決するため、あるいは問題点解決のために計測器の導入を考えている方が自分の知りたいことを見つけるために事典のような使い方をするのに適しているかもしれない。巻末付録の歩行分析シートを使ってみて、わからない点を本文で読み込んでいくという使い方もあるであろう。いずれにしても歩行分析を臨床の場で“実践”するための入門書として、本書を活用することをお勧めしたい。

B5・260頁

定価：本体5,000円＋税

医学書院刊、2016年